

# トライチュケ対モムゼン

——ベルリン反ユダヤ主義論争3——

Treitschke contra Mommsen: Der Berliner Antisemitismusstreit 3

平 山 令 二

## 要 旨

1879年11月にベルリン大学教授トライチュケが発表した論文「我々の展望」は、あからさまな反ユダヤ主義の姿勢により多くの人々の反発を呼んだ。ただし、その反発は初めほとんどユダヤ文化人によるものであり、それらユダヤ人とトライチュケの間に論争が繰り広げられた。しかし、1年後の1880年11月に局面は大きく変わった。ドイツの主要新聞に「声明」という名称で75人の非ユダヤ系文化人による反ユダヤ主義批判の共同声明が発表されたのである。署名者のなかにトライチュケの同僚であるベルリン大学ローマ史教授のテオドーア・モムゼンも名を連ねていた。自由主義者のモムゼンは、トライチュケの反ユダヤ主義的言説に中央集権的反自由主義を感じ、ユダヤ人を擁護することで同時に自由主義の擁護も行おうとした。これによりトライチュケ対モムゼンの論争が火ぶたを切った。ふたりの論争はベルリン反ユダヤ主義論争の帰趨を決めるものであり、その内容を詳しく紹介する。

## キーワード

反ユダヤ主義, トライチュケ, モムゼン, 中央集権主義, 自由主義

## 1. トライチュケ対モムゼン論争の前提

ドイツ統一から8年後の1879年11月15日、ベルリン大学ドイツ史教授のハインリヒ・フォン・トライチュケが自ら発行する『ドイツ年鑑』に論考「我々の展望」を掲載し、「ベルリン反ユダヤ主義論争」は火ぶたを切った。

トライチュケは、1871年の統一により念願のドイツ帝国が成立したものの、統一はまだ完全には達成されていない、という考えを持っていた。帝国内に完全な統一を阻害する諸勢力があると思っていたからである。その勢力でまず挙げられるのは、カトリック勢力である。ドイツはルターの国、すなわちプロテスタントの国と思われがちであるが、バイエルンを中心とした南部や西部のライン地方ではカトリック教徒が多かった。他方、北部や東部ではプロテスタントが多数派だった。

カトリック教徒の宗教上の最高指導者はローマ教皇であり、教皇は「不可謬」とされる。すなわち、宗教上の問題について、一定の条件はあるものの教皇の判断は誤ることがないとされる。もちろん、それで世俗的な問題についても教皇が誤ることがない、とはされないのであるが、宗教上で絶対的な権威とされる教皇が世俗的な問題においても権威がある、とカトリック教徒が考えるのは当然の成り行きだろう。ローマ教皇職に就いたのはイタリア人が圧倒的でドイツ人は珍しい。宰相ビスマルクは、ドイツ人のカトリック教徒は、ドイツ人の皇帝よりも外国人のローマ教皇を世俗的な判断においても基準とするのではないかと懸念して、さまざまな手段でカトリック勢力を抑圧しようとした。これに対してドイツのカトリック勢力も抵抗をした。これが「文化闘争」と呼ばれる紛争である。

トライチュケが次に統一の妨害者とみなしたのは、根強いドイツの地方主義である。長く統一国家を持たなかったドイツは、多い時には大小取り交せて300もの国家が存在した。そのように分裂していた国々で長く生きていたドイツ人が、統一国家の成立後も地方主義を信奉するのも当然の成り行きだろう。政治、経済、軍事などの公的な場面だけでなく、言語や生活習慣という日常生活に至るまで、それぞれの地方の特色が見られた。江戸時代に藩単位で違う国とされていたようなものである。このような地方主義はプロイセン主導のドイツ帝国が成立したあとも根強く残り、ドイツ

帝国が中央集権化を強めようとするるとそれに対する反発も強まった。

トライチュケが敵視した第三の妨害者は自由主義である。ドイツ統一を進めたのはビスマルクの「鉄と血」の政策であり、オーストリア、デンマーク、フランスと対外戦争に勝ち抜くことで最後にパリのヴェルサイユ宮殿で統一の式典を行うことができた。しかし、その背景には自由主義者、とりわけ経済界の自由主義者の支援があったことを忘れてはならない。中央集権主義者のビスマルクと自由主義者の奇妙な同盟がドイツ統一の成功を導いたとも言える。しかしながら、自由主義者たちもドイツ帝国の中央集権主義が強まるにつれて、反比例してビスマルクの政策に反発していった。

最後に、そしてトライチュケが最大の妨害者とみなしたのがユダヤ人である。ゲルマン民族ではないのにユダヤ人は帝国の経済やジャーナリズムの中心にいて、株式市場を支配しているのも新聞を支配しているのもユダヤ人である、とトライチュケは考えた。ユダヤ解放令で同権を得ていたユダヤ人は各界の権力を持つことで傲慢になり、帝国のなかで独自の存在としての地位を固めるようになった。このことはドイツ帝国を分裂させるきっかけになりかねない。ユダヤ人の多くは自由主義者であり、自由主義者とユダヤ人の同盟はまた致命的な影響を持ちかねない。このような考えに基づいてトライチュケは「ユダヤ人は我々の不幸である」という極論まで述べることになる。

トライチュケの露骨に反ユダヤ主義的な論考に対して、反論がすぐさま加えられた。予想できることであるが、まずはユダヤ人による反論であった。ユダヤ教の聖職者であるラビからは、エアフルトのカーロ、ゲルリッツのフロイント、オルデンプルクのグリュック、ブレスラウのヨエル、ベルリンのマイヤー、レーバウのラディンが反論を公にした。ユダヤ人政治家では、トライチュケと同じ国家自由党のふたりの議員、ルートヴィヒ・バンベルガーとハインリヒ・ベルンハルト・オッペンハイムである。その

他にはプロテスタントに改宗したユダヤ人牧師のパウルス・カッセルもいた。トライチュケに反論した残りのユダヤ人はすべて大学教授で、ブレスラウのハインリヒ・グレーツ、マールブルクのヘルマン・コーエン、さらにベルリン大学でトライチュケの同僚であるハリー・ブレスラウとモーリッツ・ラツァールスである。

他方、ユダヤ人以外のキリスト教徒でトライチュケに反対を公にした人物は少なく、トライチュケの同僚の名高いローマ史家テオドーア・モムゼンとフランクフルトのギムナジウム教授のカール・フィッシャーのふたりだけだった。

このように「ベルリン反ユダヤ主義論争」と言っても、最初のうちは実質的に反ユダヤ主義的論文を書いたトライチュケ対ユダヤ文化人の論争であった。繰り返すが、ユダヤ人を擁護するキリスト教徒の声はモムゼンとフィッシャー以外にはなかったからだ。

ところがトライチュケが論文を発表してからちょうど1年になる頃、状況は劇的に変化した。1880年11月14日の日曜日、いくつかの主要新聞にユダヤ人ではない著名人たち65人が署名した「声明」が掲載された。反ユダヤ主義に明確に反対する内容の声明だった。そこに署名したベルリン大学関係者は学長の他、フィルヒョウ、グナイスト、それにトライチュケの親しい同僚であるシェーラー、ドロイゼン、ヴァッテンバッハにモムゼンであった。

以下、「声明」とそれに対するトライチュケの反論、さらにモムゼンの反応を見てみよう。

## 2. トライチュケ対モムゼン論争のきっかけ

声明<sup>1)</sup>

激烈な戦いが我らの祖国を統一し、力強く勃興する帝国にした。この統一は、ドイツ人の民族意識に必要な帰属感が、他民族に例のないほど我が民族を分裂させてきた種族や信仰の対立に勝利したことで獲得されたものである。そのような相違の償いを個々の成員にさせるのは、不当であり下品である、とりわけ国民と誠実に手を携えることで異質性を脱しようと誠実かつ真面目に努力している人々を傷つけるものである。償いをさせることは、努力している人々にとっては、同じ目標を目指して努力していると彼らが思っている人々の約束違反であると感じられ、ドイツ国民に以前から影響を及ぼしてきたすべての対立の解消、という共通目標の維持がそのことにより妨害される。

予期しなかった、また深く恥じ入らせる方法で現在さまざまな場所、とりわけ帝国の最大都市のいくつかで、中世の人種憎悪とファナティシズムがまた息を吹き返し、我々のユダヤ人同胞に向けられている。忘れられているのは、多くのユダヤ人同胞が生業や商業、芸術や学問で勤勉さと才能により祖国に利益と名誉をもたらしたということだ。破られたのは、すべてのドイツ人が権利と義務において平等である、という法律上の規定また名誉の規定である。この平等を実現することは裁判所だけではなく、個々の市民すべての良心にも書かれていることである。

古くからの妄想の再生は、国家と市町村、社会と家族においてキリスト教徒とユダヤ教徒を寛容の土壌で結び付けている現状を伝染病のように害そうとしている。今はこの運動の指導者たちによってねたみやそねみがただ抽象的に説教されているだけだとしても、大衆はそのような無駄話から

実践的な結論を引き出すことに躊躇しないであろう。我々の文化はかつて世界に唯一神の崇拜を伝えたこの種族の孤立を克服した、と教壇や説教壇で宣言している男たちは、レッシングの遺産を揺るがしているのである。さまざまな職業や生業、顕彰や重要ポストからユダヤ人を例外扱いする法律と排除を求める叫びがもう聞こえ始めている。大衆がこれに賛成するまで、あとどのくらいの時間がかかるのだろうか？

混乱に立ち向かい、国家的恥辱を防ぐ時間はまだあるし、人為的に煽られた大衆の熱気は思慮ある人々の抵抗により抑えることができる。我々の呼びかけは、宗教が平和のよろこばしい福音であるあらゆる宗派のキリスト教徒に向けられている、我々の呼びかけは、自分たちの偉大な領主たち、思想家と詩人の理想主義的な遺産を心にかけているドイツ人すべてに向けられている。公的な声明と静かな啓蒙活動によって我々の共同生活の土壌を守ろう、キリスト教徒に対してもユダヤ人に対してもあらゆる信仰の尊重、同権、競争における平等な評価、立派な努力の平等な承認がそれである。

ベルリン、1880年11月12日

\*

以上の「声明」が反ユダヤ主義として名指しているのはまず「中世の人種憎悪とファナティシズムがまた息を吹き返して、我々のユダヤ人同胞に向けられている」とあるように、中世に聖餅冒瀆や幼児の儀式殺人などの汚名を着せ、ユダヤ人を虐殺した狂信的なキリスト教徒のような同時代の大量である。しかし、「声明」が直接的な非難を向けているのは、より具体的に同時代の反ユダヤ主義的文化人である。

「我々の文化がかつて世界に唯一神の崇拜を伝えたこの種族の孤立を克服した、と教壇や説教壇で宣言している男たちは、レッシングの遺産を揺る

がしているのである。」ここで「レッシングの遺産を揺るがしている」「教壇や説教壇」の男たち、と書かれているのは、具体的にはふたりの人物を指している。ひとは宮廷説教師であるアドルフ・シュテッカーであり、もうひとりがベルリン大学教授のトライチュケである。「レッシングの遺産」とは、ドイツ啓蒙主義を代表するゴットホルト・エフライム・レッシングの宗教的な寛容思想、とりわけユダヤ人に対する寛容思想を意味している。レッシングは代表作である戯曲『賢者ナータン』でユダヤ人商人ナータンを主人公にして、人種や宗教に対して偏見のない高潔な人物像をユダヤ人であるナータンに書き込んだのだった。そのようなレッシングの宗教的寛容の思想が反ユダヤ主義の運動により揺るがされていると「声明」は訴えている。

この「声明」によりトライチュケとモムゼンの論争が始まった。以下に訳したトライチュケ2篇、モムゼン1篇はその短さや内容からして、いわば両者の論争の前哨戦とも呼ぶべきものである。内容的に問題になっているのは、第一にトライチュケが書いた論文の内容というよりは、「声明」が批判している反ユダヤ主義者のなかにトライチュケが入っているのか、つまりトライチュケが標的になっているのかということである。第二には、大学教授でありジャーナリストでもあるトライチュケが標的になっているとしたら、批判されているのはトライチュケのジャーナリストとしての活動だけなのか、あるいは大学教授としての教育活動も問題にされているかということである。

\*

ハインリヒ・フォン・トライチュケ

「ポスト」紙への書簡<sup>2)</sup>

11月12日付のフォルケンベック氏とその仲間たちの声明には次のように書かれている。「我々の文化がかつて世界に唯一神の崇拝を伝えたこの種族の孤立を克服した、と教壇や説教壇で宣言している男たちは、レッシングの遺産を揺るがしているのである。」

最初に読んだとき、この文が私個人になんらかの関係があるとは思ってもよらなかった。なぜなら、この文が私に関係があるとするならば、この文章を、少なくとも事情を知らないすべての人々は、教壇での私の活動に対する公然とした告発であると解釈するに違いないからだ。名誉ある人々、そして私の教育活動を身近で知っている同僚たちまでが、思慮のない言葉で根拠のない疑念を至る所に広げるきっかけを与えるとは考えられなかった。

この間、私はさまざまな方面から、一般読者があの文は私と私の大学での活動に向けられたものと見なしている、と聞かされた。私は正々堂々と論戦をし秘められた邪推をすべて黙って無視することに慣れているが、大学教師としての私の立場は、この問題の根本を明らかにすることを命じたのである。

それゆえ、私はこの「声明」の署名者のうち3人に同時に手紙で問い合わせた。そのうちのひとり、この文書の全体をざっと見ただけで、あの文にはまったく気づかなかった、と返事をよこした。ふたり目は、誰も私のことをまったく考えていなかった、と断言した。しかし、3人目(名前は当面秘しておく)は、もちろんあの箇所はあなたにも向けられたものです、と大胆にも明言した。

このような自白を知ったので、私の聴講者と私の学者としての名誉のために、あの言葉からすでに導き出された、また今後さらに導き出されかねない、私の教師としての活動に関するすべての中傷を、この書簡により公に反論することが私の義務であると考えた。

私がジャーナリストとして1年前に、ドイツのユダヤ人の現状について



書いたことは、誰かが根拠をもってより正確なことを教えてくれるまでは、間違っていないと考える。感情的な怒りの大声の言葉を私は反論とは見なさない。

ベルリン，1880年11月17日

\*

テオドーア・モムゼン  
国民新聞への手紙<sup>3)</sup>

尊敬する貴紙へ！

貴紙の今日の朝刊で、トライチュケ教授が、貴紙の日曜版で公表された声明に署名した同僚たちの何人かに、「レッシングの遺産を男たちが揺るがしている……」という声明の言葉が自分にも向けられているのかどうか、という質問を投げかけたことを知った。そして質問された3人のうちひとりしかこの質問に肯定的な答えをしなかった、とある。私は質問を受けた当事者ではないが、署名した者のひとりなので、トライチュケの質問にある解釈を私として肯定することが適切だと思う。この声明の文面は、うわさされているように私がまとめたものではない、しかし、この非難が第一にトライチュケ氏に向けられていることを完全に意識して、少なくとも私は署名した。

ただし、トライチュケ氏が声明の言葉に与えた解釈は、あくまでも彼自身のものである。私に関して、あるいはその他の署名者に関しても、トライチュケ氏がその講義で日々の政治的問題に対して取っている態度を宣言の内容に関係させようとか、それについての情報がたまたま我々の耳に入ったとしても、我々がその情報をこのようなやり方で使おうとしたとトライチュケ氏に考えてもらっては困る。我々は、レッシングの遺産を揺るが

していることでトライチュケ氏を告発している。彼が教壇でレッシングが説いた寛容の福音を説いていないことを遺憾に思う。なぜなら、ジャーナリストとしての彼が主張している内容に教師としての彼も反対しないだろう、と推測しているからだ。彼が『プロイセン年報』で説いていて、今でもその内容を信奉している不寛容の福音を教壇に持ち出したということについては、声明でひと言も触れていないし、触れることが意図されていたわけでも確かでない。大学教師であり同時にジャーナリストである者が、ジャーナリストの側面に対して向けられた攻撃を、ある種の限界内で神聖不可侵と考えても間違いでない大学教師の領域に対する攻撃でもある、と主張するのは賢明なことではない。

シャルロッテンブルク、1880年11月19日

\*

ハインリヒ・フォン・トライチュケ

反論<sup>4)</sup>

私は、「声明」の署名者たちが私の大学での教育活動に触れるつもりはなかった、というモムゼン教授の断言をよろこんで受け入れる、しかし、署名者たちがこれからは強烈的な言葉の使用についてより慎重であってほしい、という希望を抑えることができない。声明で使われている「妄想」、「疫病」やその他の荒っぽい言葉に、モムゼン氏が今回「寛容の福音」という言葉も付け加えたので、このことにより彼は気弱な何人かを萎縮させるかもしれない、しかし、このことで激高した世論の鎮静化に役立つことは確実に何もないだろう。

私はいくつかの著作のなかで、国民の人間的教養がレッシングという人物に払わなければならない感謝について、まだ不十分かもしれないが、明

確に表明してきた、そして声明の署名者たち全員が、私よりずっと深くレッシングの精神を究めているということをよろこんで信じたいが、これまで彼らのうちでひとりとして私より優れたその認識を世に公表した者はいない。したがって、私は、彼らが根拠も示さずに「レッシングの遺産」の問題で私を公に叱責する権利があると思うことに反対する。

ユダヤ問題に関する私の考察の核心は、「私たちがユダヤ人同胞に要求しなければならないものは、単純なことである。彼らがドイツ人になり、自分たちを素直にかつ正しくドイツ人と感じることである」。私は、世界の至る所で「ユダヤ人はコスモポリタニズムと国家の分解の有効な酵素になっている」（ローマ史第3巻550ページ）という同僚モムゼンの悲観的な考えを採らない、ユダヤ人解放が成就したあと何年か経て内的統合と和解も続くだろう、と期待している。この意味において私が論考を書いたときには、もちろん自分は「レッシングの遺産」に忠実であり続けていると思っていた、キリスト教徒に対して怒りの言葉で寛容を説教しながら、ユダヤ新聞によるキリスト教への嘲笑に対しては警告の言葉をひと言も述べていない声明の署名者たちよりは少なくとも忠実だと思っていた。

ベルリン、1880年11月19日

### 3. モムゼンのユダヤ人論とトライチュケの反論

これまで見てきたように、トライチュケとモムゼンの論争の前哨戦では、「声明」でトライチュケが反ユダヤ主義者として標的にされているのか、また標的とされているなら、問題はトライチュケのジャーナリストとしての活動なのか、それとも大学教授としての教育活動も含まれるのかということが焦点であった。モムゼンは最初の問には肯定で答え、後者の問には否定で答える。つまり、トライチュケは反ユダヤ主義者であり、反ユダヤ主

義をジャーナリストとして宣伝していると断定するが、大学の教壇におけるトライチュケについては反ユダヤ主義を積極的に学生たちに宣伝している、という評価は下していない。ただし、トライチュケが「教壇でレッシングが説いた寛容の福音を説いていないことを遺憾に思う」と明言している。トライチュケの教育活動にも大きな疑問符をつけていることになる。

モムゼンのこのようなトライチュケ評価は、いわばトライチュケという人物の全否定にもつながりかねないものである。これはモムゼンが筋金入りの自由主義者であり、トライチュケの反ユダヤ主義がその中央集権主義的なドイツ帝国像に基づいていることに我慢できなかったからと思われる。しかし、モムゼンがトライチュケにそのような厳しい評価を下したからには、次に問われるのは、モムゼン自身がユダヤ人についてどのような見解を抱いているのかという基本姿勢である。モムゼンはそれを明らかにするために長い論文を書いた。タイトルが「我が国のユダヤ人についての異論」となっているのは、トライチュケによるドイツのユダヤ人についての論考への反論という意味である。

以下でモムゼンの論考とそれに対するトライチュケの反論を見てみよう。

\*

テオドーア・モムゼン

我が国のユダヤ人についての異論<sup>5)</sup>

現在ドイツとユダヤ双方の愚民の不協和音を最大限かき立て、ドイツ教養層の嫌悪的になっているユダヤ問題に関する大騒ぎのなかで、個別の声に耳を傾けるのはほとんど不可能だろう。この扇動がそのまま陰謀ではないということを信じられるとしても、混乱を和らげることは困難に思われる。私が言おうとするわずかな言葉が、この問題に関する私の判断を知

ることに関心のある人々への答えになるとすれば、満足である。この問題はこれまで長い間、良き盟友だった多くの人々を分裂させる、そして分裂は痛みを伴う。相互理解の言葉が届くこともあるだろうが、その言葉は一般的なものとしては消え去ってしまうだろう、しかし個別的な言葉としてはあちこちでその目的を達するだろう。

我々の世代は、物事を考え始めたときに、眼の前にあった偉大な目標が我が国民によって達成されたと言うことができる、歴史上まれな世代である。助言権のある身分制議会のあった時代やドイツが地図上でしか一色に染められていなかった時代をまだ覚えている者にとっては、我々の帝国議会と我々の帝国旗は、たとえ何があろうと、また実際これからもたくさんのが起こるだろうが、何よりも貴重なものであろう。しかしながら、この幸せをよるこぶためには、確固とした気持ちと広い視野が必要である。ただし、最近の一連の出来事は、運命は願望の充足によって人間を罰するという格言を思い出させるものだ。成立しつつあるドイツにおいては、共に闘う仲間について信仰や身分の違いで判断するのではなく、また地方人と都会人、商人と実業家の利害の相違でも判断しないことが適切なのではないか、という意識が生まれた、しかし成立したドイツでは万人の万人に対する闘争が荒れ狂っている、我々は間もなく、第一に出自をマヌ（注　ゲルマン神話の原像）の3人の息子の誰かに遡及でき、第二に聖職者の解釈の通りに福音書を信仰し、第三に耕作と播種に巧みであると証明できる者のみが、完全な権利を持つ市民と見なされるようになるだろう。ずっと前から勃発している信仰上の戦争、いわゆる文化闘争と最近煽られた財政をめぐる内戦に並んで、今三番目に始まったのが国民感情の鬼っ子、反ユダヤ主義者たちの出征である。

すべての意志と希望が国民的思想のさなかで成長した我々年輩の者は、このような運動に対してとりわけ二重の感情で向き合っている、一方では

サトゥルヌスがその子をまたしても食らっているという感情であり、他方でこのような展開は、時代に逆行するすべての運動のように、歴史がまさしく小説のように揺れ動いて、結局は物事を何も変えられないという結果になる停滞する瞬間であるという感情である。しかし、このことはこの運動が人や利害に大きな災いをもたらすことを妨げないし、国民感情の自殺的な運動を黙って傍観する権利を我々に与えるものではない。

ドイツ国民は、この点ではみな同じ考えだろうが、さまざまなドイツの種族の結束、そしてある意味では分解によって存在している。ザクセン人やシュヴァーベン人がラインラント人、ポンメルン人のことを仲間、つまり市民の権利、義務についてだけでなく、個人的また社会的な交流においても完全に仲間とみなすことによって、我々はまさにドイツ人となる。我々は身近な同郷人により深い共感を抱こうとして、さまざまな思い出や、この地域を超えると反響のないようなさまざまな感情を彼らと分かち合おうとする。大規模な一体感を国家は生み出したが、さまざまな種族が互いに異質な存在と感じ始めるようになれば、この一体感は崩れてしまうだろう。我々は相違を隠すことはない、しかし、大国の持つ多様な目標と状況は実に多様な人間を求めるものであり、我が偉大で春秋に富む民族に与えられた多くの天分と課せられた多くの義務が、個々の種族によって完全に発展させられることや、完全に果たされることは不可能なので、正しく感じることのできる者は、この相違をよろこぶのである。

それでは、ドイツのユダヤ人は我が民族の内部でザクセン人やポンメルン人とはどのくらい異なるのだろうか。彼らがイスタエヴォやヘルミーノ、インガエヴォの子孫ではないことは間違いない、そしてゲルマン人の先祖を確かめるテストをドイツ人にするならば、父親ノアの共通の子孫であることだけでももちろん十分ではない。タキトゥスの『ゲルマニア』を基準にして現存するドイツ国民をテストするならば、ドイツ国民からイスラエ

ルの子らの他にさまざまな者たちがこぼれ落ちることだろう。何年前、キャトルファージュ氏（注 フランスの人類学者）が、実際にゲルマン人なのはドイツ中央部の諸国家だけであり、プロイセン人種は墮落したスラブ人とあらゆる他の零落した人種が一緒になった集団であることを証明した、後になりゲルマン人種とプロイセン人種が偉大な国民（注 フランス人）に対して共同して進軍するようになったとき、行進のなかで両者の区別がつかなくなったのである。歴史を本当に知っている者は、国民を形成する民族の変化が段階的に進んで行き、多様な移行形態を伴って行われることを知っている。歴史的また実際的にどこでも生者のみが権利を持っている、ドイツでベルリンのフランス人居住地の子孫たちが生まれながらのフランス人であるとはほとんど言えないように、ユダヤ人同胞がドイツ人と違うと言うこともほとんどできない。トライチュケ氏がユダヤ人に関する論説の冒頭に書いた、東側国境を越えてくるユダヤ人の大量移民は、周知のようにノイマン氏が統計を基にして誰もが納得できるように証明した通り、まったくのどっち上げである、またこれも周知のように、トライチュケ氏は「自分が言ったことをひと言も撤回しない」と書いたが、彼同様の意見を表明した断固たる反ユダヤ主義者であるアドルフ・ヴァーグナー氏は、この問題で間違っていたと率直に告白したのである。

古代と近代におけるユダヤ人の立場の本質的な対立は次の点にある。古代世界は、我々が今日国民国家と呼んでいる形態を知らない。ギリシアやローマの都市共和国のような古代の国家形成は近代の国家形成からずっと遅れているものであるか、あるいはアレクサンダーやシーザーの君主国のように近代国民国家をずっと凌駕しているものである、後者において、またそもそも古代においては、今日あらゆる政治的形態の根拠となる均質でほぼ言語圏に重なる国民層のことは考えられなかった。したがってユダヤ人は古代ではユダヤ人国家没落のあとも、特にユダヤ人に独特な文学的な

かで表現されるある種の国民的一体感を保持していた。ただし、やがてユダヤ人は作家として自身の言語の代わりにその時代の世界言語を使用することを始め、ギリシア的教養という当時一般に認められていた立場に立った、しかしながら、もっとも傑出した作家たち、歴史家のヨセフス、哲学者のピロンは完全なユダヤ人であり、ユダヤ人の意識的な代表者だった。そのようなユダヤ文学は今日もはやない。トライチュケ氏がグレーツのタルムード的な歴史記述に眼をつけるとき、そこでの文学的視角を考慮していないことを忘れている——あるいは、ドイツの歴史記述について例えばフルター（注 フリードリヒ・エマヌエル、歴史家）とその仲間に基準としての責任を負わせるのだろうか？ ユダヤ・アレクサンドリア的な文学は、古代後期の歴史において重要な要素である、今日それに似たものがあるだろうか？ 近代のユダヤ人から生まれた優れた業績はすべて、まさしくユダヤ人の属する国家の文学圏内にある。このことは、そもそも最高レベルの業績では国民性が感じられることがほとんどなくなる哲学や抽象科学において、個別の国民性が現われることは詩よりもまれである。私は名前を挙げるつもりはないが、ある程度重要なあるいはある程度成功しているユダヤ人の詩人や小説家を思い出してもらいたい、彼らには出自の痕跡をおそらく見出すだろう、なぜなら詩人は誰も自分の出身を否定できないからだ、ゲーテもフランクフルトの子でいつまでもあり続ける、しかし、彼らが素晴らしいか、平凡か、不快であるかは、ユダヤ人内部では判断できない、ドイツのイスラエル人は、イギリスのユダヤ人がイギリスの文学生活でそうあるように、ドイツの文学生活の真ん中に立っている。

今大衆を牛耳っているのは妄想の真の在処であり、その妄想の真の予言者はトライチュケ氏である。彼が我々のイスラエル人同胞にドイツ人になれと要求する意味は何だろうか？ 彼らはトライチュケや私同様によりドイツ人である。トライチュケはユダヤ人より徳があるのかもしれないが、



徳があることでドイツ人になるのだろうか？ あれこれのカテゴリーに分けられる我々の同胞を、そのカテゴリーに一般的である欠点のために、たとえその欠点が悪徳とされるのが正当でも、ドイツ人の列から除く権利を誰が我々に与えるのだろうか？ これら同胞の欠点をどんなに鋭く感じ、欠点を緩和する理由をどんなに素っ気なく無視したとしても、論理的にも実践的にもせいぜいユダヤ人を原罪が二重に考えられたドイツ人であると表明するだけのことになる。この問題を明確に意識した真面目な人間は、刑罰に関わる場合とまったく同様に、できるだけ予防的な立法によって欠点の有害な影響を抑えることが緊急に必要であることを疑わないであろう、仮定された原罪の量でドイツ市民の地位を規定するという事は不可能なのだから。

しかし、このような洞察だけで十分なわけではない。ドイツの西洋人とセムの血を引く者の間にそれでも存在する不平等を理解するには、もっと明確にもっとやさしく対応する必要がある。やっと統一したばかりの国民である我々は、このユダヤ戦争によって危険な道へ足を踏み出している。我々の諸部族はきわめて均一なものではまったくない。特殊な欠点がない部族はひとつもない、そして我々相互の愛情は、ほころびが出ないほど長い歴史のあるものではない。今日ユダヤ人に関して——洗礼を受けていなくとも、また受けていたらその程度について、彼らの神を調査することは必要ではない、なぜなら牧師的正統派とゲルマン的正統派の心底からの合意がそんなことで壊れてしまうし、これからの混血規則が出生の問題からエルンスト・ドーム氏（注 改宗したユダヤ人編集者）の領域になってしまうからだ。厳密に調べたならば、明日からベルリン子は誰もがセム人そのものになってしまうかもしれない。それどころかボンメルン人は統計調査を怪しげな連中にまで広げることを要求し、それにより西の地域のユダヤ人は二倍になることが証明されることを期待している。そうすることは我々

国民の統一を揺るがすには、まずいやり方とはまったく言えないだろう。統一は我々自身の功績というより、我々の敵の憎しみに負うところ大である。戦争が結び付けたものを平和、とりわけ現在、新聞や演壇を支配しているような平和が、再びゆるめてしまうだろう。ただしこの道を先に進むことは、偉大なドイツ国民が今、マカベウスのユダ（注 ユダヤ民族の英雄）のいないミュンヘン（注 ベルリンのユダヤ人居住地）に対して試みようとしている総攻撃よりも手間のかかることだろう。しかし、ファナティズムは残念だが必ずしも一貫性がないわけではない、そして国民の西と東、北と南の間の争いは、とっくに死んで葬られたと思われた他の化け物たち同様に、死者を蘇らせることだろう。戦場で勝ち取ったものを防衛するには三十年を要する、というモルトケの言葉を我々全員が記憶している。しかし、防衛とは単に統一を意味するだけではなく、精神の合一も意味するのである。

我々の間で暮らすユダヤ人の特性が他の種族や他の国民の特性よりもずっと強いものかどうかについては、まったく意見が一致していない。彼らの特性は出生以来はっきりしているが、その特性はドイツのキリスト教徒によってドイツのセム人に対してなされた、双方にとって等しく破滅的な千年にも及ぶ抑圧によっても、人為的に、また一部は恐ろしい方法で強められたのだった。我々の政治的ならびに文学的発展にその歴史的痕跡が残っているし、歴史家ならばその痕跡を無視することはできない。ロートシルト家の歴史はザクセンの国内史にとってよりも世界史にとって意義がある、この場合、ドイツのあるユダヤ人の歴史であることは意味がなくなるのではないだろうか？ 我々の世紀はハイネよりも才能のある詩人を見出してないだろう、心情と知性のこのような戯れ、官能と幻想においてシェイクスピアの性格悲劇に匹敵するほどのすさまじい創造の才能を眼にして、ハイネの出自を思い出すことしかできない人間がいるのだろうか？ 確

かにドイツのキリスト教徒とユダヤ人の間に違いはある、そしてその違いは、ある時期のユダヤ崇拜あるいは——今日一般にどのような形で現れるにしても——ユダヤ人恐怖は我が国民が利用することを好んだ、そして好んでいる愚劣きわまりない混乱の一部だろう。しかし、ユダヤ人の限界や欠点に、反ユダヤ扇動のきっかけに少なからずなった彼らの能力や長所が再び対立している。あらゆる哲学者のなかでもっとも純粹でもっとも理想主義的な哲学者がユダヤ人として生き、苦しんだということも偶然ではない、そしてキリスト教徒にも向けられるユダヤ人の善意は、キリスト教徒の手本になるだろう。手本はまさしく至る所にある。光と闇は混じり合っている、どちらが多いのか少ないのか、宮廷牧師以外の誰も判定しようなどとは思わないだろう。疑いもなく、ユダヤ人はかつてのローマ国家でそうだったように国家解体の一要素である、そしてユダヤ人はドイツにおいては諸種族の解体の一要素であり、諸種族が実際どこよりも色濃く混じっている首都ベルリンにおいて、ユダヤ人が他の人間が羨ましく思う地位についていることも、ユダヤ人が諸種族の解体の一要素であることに基づいている。解体過程はしばしば必然的であるが、決してよろこばしいことではなく、結果として不都合な状態が長く続くのが避けられない。ドイツ国民であることはカエサル的帝国帰属のようなあいまいな形式ではまったくないから、我々の解体過程はローマよりはましである。しかし、自分の故郷から気持ちがそれほど離れていなければ、自分が持っていたものを子どもたちが持たないことにしばしば苦痛を覚えることはないだろう。だが、子どもの幸福と男の誇りはどうしても一致させることはできない。各種族の持つ鋭角をある程度互いに削り合うこと、特定の地方性につながらのいないドイツの国民性の創出は現状からして絶対に必要であり、ベルリンを先頭にした大都市はそうするためにふさわしい中心地である。ユダヤ人が何世代も前からこの方向へ向かう影響力を及ぼしてきたことを、私は決して

不幸なことだとは思わない、私見では、ゲルマンの鋼を鍛えるためになぜ数パーセントのイスラエル人を加えなければならなかったのか、という理由をシュテッカー氏（注 アドルフ・シュテッカー、反ユダヤ主義の宮廷牧師）より神はずっとよく分かっていたのである。

これは歴史的事実に関するひとつの見解であり、他の人々には少し違うように見えるだろう、ファナティズムが中立的な領域をまだ認めているならば、事実に関する多少の意見の違いは、人々の心を乱したり、仲たがひさせたりすることはないだろう。大切なのは、混乱や分裂から実践的な行動の確かな原則に至ることである、私はこの点をドイツ人の義務と思うと表明したい。政府には、そうしたくても、この点でできることはほとんどない、我々が自由な民族であり、自分自身と自分の使命を統御することができるのか、犯してしまった過ちを改善することができるのかを証明することは、ひとりひとりのドイツ人に課せられているのである。

良俗と高貴な義務は、個々の国民や種族の特性を節度と寛容さをもって論じるように命じている。著述家が有名であればあるほど、この点において国際的平和また国家的平和が必要とする限度を守る義務を負う。ドイツ人がイギリス人とイタリア人の特性描写をすること、シュヴァーベン人がポンメルン人とラインラント人の特性描写をすることは危険な企てである、どんなに誠実にまた善意でしたとしても、取り上げられた側にはすべてが非難としか聞こえない。特性描写では一般化が避けがたく、また不当であることも避けがたいので、取り上げられた側を不快にし、憤慨させることになる、他方、特性描写で特徴づけられた欠点の改善を期待するのは当然ながら笑うべき不可能事だろう。とりわけこの点に、トライチュケ氏がそのユダヤ人論によって加えたひどい不正と計り知れない損害がある。「下着を売る若者たち」と「最高の教養を備えたグループで『ユダヤ人は我々の不幸だ』という叫びをあげた男たち」という言葉がそれであり、トライチ

ユケ氏が自ら予想したように、これらの「宥和的な言葉」の誤解は実際に起こっているのである。確かにそれらの言葉はまったく善意によるものだった、確かに提出された個々の告発は幾重にも真実に基づいている、確かにユダヤ人に対するもっとひどい告発がなされて耳を傾けられることなく何千回も消えてしまった。しかし、ドイツの市民層の一部にあるユダヤ人への違和感が、「同じ義務は同じ権利を要求する」ということを単なる知識として覚えただけでなく、実際的な帰結をも引き出した国民の良識層の強い義務感によってこれまでほぼ抑えられてきたとしても、この違和感はトライチユケ氏によって「異質な要素に対するゲルマンの民衆感情の自然な反応」とか、「深部で長い間抑えられていた怒りの爆発」として今や宣伝されている。これを言ったのは、最近の深刻な危機においてドイツ国民がもっとも感謝しなければならない著述家、トライチユケ氏である、国民の古くからの仇敵である地方分立主義を相手にした終わりのない戦いにおいて、彼の筆は最良の刀の一振りであったし、今もそうである。彼の言ったことは、だからうまく当たったのである。だから、私たち皆が眼にした論説は爆弾のような効果があった。そのため恥じらいの鼻輪はこの「深く強力な運動」から取り去られてしまい、今や大波が湧き、泡が吹きあがった。

疑いもなくトライチユケ氏はこの大波と泡を望んでいなかった、そして彼に対してその振る舞いの個別の結果に責任を求めることを私は思いもしなかった。しかし、彼は何を望んだのだろうか、という疑問は不可避である。あの「深く強力な運動」は何らかの目的を持っていたのではないかとトライチユケ氏はきわめて雄弁だ、しかし、彼自身は、自分の教説のようにユダヤ人が、彼の表現を借りると、全員ドイツ人になるということをはほとんど信じてはいなかっただろう。信じていなかったとすれば、彼はどうすべきだったのだろうか？ この点について明確な言葉を少しでも述べていたなら、目的のない大言壮語を並べるよりも有益だったろう。明らかにな

っているのは次のことだ。ドイツ国民であるユダヤ人は論説を読んだ全員が、トライチュケ氏はユダヤ人を二級国民と考え、せいぜい矯正可能な懲罰部隊と見なしているものと理解した、あるいは理解しなければならなくなった。つまり彼は内戦を説いていることになる。トライチュケ氏の先例に倣って反ユダヤ主義者に現在知られるようになった個別のユダヤ人や個人的知り合いを例外扱いすることを、トライチュケ氏と後継者は上手にやらずにすんだはずだ。イタリア人がドイツ国民に対して中傷文書を書いて、トライチュケ氏個人を例外扱いしたら、トライチュケ氏に二重の侮辱が加えられたことになるのではないか？ 彼が背を向けていないユダヤ人たちが彼に背を向けたことはまったく正しいことだ。確かに彼はプラトニックな内戦だけを考えていたのだろう、しかしながら、プラトニックな愛が終わるのが通例であるように、プラトニックな内戦も終わってしまった。悪しきユダヤ人は前のままで変わらない、よきユダヤ人はキリスト教徒に背を向ける、キリスト教徒からもあらゆる階級の愚民が無防備な獲物を求め殺到し、よりよいキリスト教徒たちの一部は不安になり揺れ動いている。トライチュケ氏は当然なことだが、他の著述家に例がないほど、ドイツ人に対して政治的、道徳的影響力を持っている、よくあることではあるが、彼は自分の高い地位のために自分の誤りが持つ影響によって罰せられている。

「ユダヤの鏡」であれ何という名前であれ、各紙で今行われている日々の扇動を、読者は排除できなくても、無視することはできる。無視が行われないことのないように、そして逃げ去った寛容が戻ってきますように、——ここでの寛容とは、自明なことだが、シナゴークに対する寛容ではなく、ユダヤ人に責任がないのに運命としてユダヤ人が世界中で持たされたユダヤ的特徴に対する寛容である。ドイツのユダヤ人特有の地位が持つよい面と悪い面について、——現代の歴史記述家も文学史家もこの対比を論じな

ければならないが——それなりの著述家は、物分かりのよいユダヤ人が受け入れられる論じ方をうまく見つけることができるだろう。ある種のユダヤ的要素の悪しき振る舞いを抑えることも、非の打ちどころのないユダヤ人同胞がキリスト教徒と完全に同等の寛容をもって配慮される権利を持つこととまったく矛盾しない。ユダヤ人の高利はお伽話ではない、犯罪的あるいは社会を害する恐れのある行為を国家権力が制御できる程度に、高利法がユダヤ人の高利を制御してほしいものである。ユダヤ人の友と同様にユダヤ人自身もこのことを強く望んでいる、この機会にキリスト教徒の吸血高利貸しもひどい目にあうならば、熱烈な反ユダヤ主義者も反対しないだろうと希望する。さらに、ファラオがユダヤ人問題を根本的に解決したときにも、エジプトで高利が決して消滅しなかったという歴史を思い出すのが賢明だろう。

「実現した解放を撤回するとか制限することさえ、分別のある者の間ではまったく問題にならない」とトライチュケ氏は言っている、「そうすることは明らかな不正である」。そんなことを言わなければならないだけで、十分にひどいことだ！ しかし、ツェルナー氏と彼の同志たちのいわゆる反ユダヤ主義請願運動が請願しているのは、あからさまな不正よりたちが悪い、それは秘密で陰險な不正である。ビスマルク公がツェルナー氏のつまらない見解に従って国民を改造したら、ユダヤ人はお上のすべての地位から排除されることになり、司法職にその見解を適用したら、とりわけ個々の裁判官が「相応の制限」を被ることになる、そして付随文書は、政府がこの請願を立法の要素をまったく入れることなしに行政的手段だけで承認することができる、とビスマルク公に入れ知恵をしている。したがって、このような主張によるなら、ユダヤ人が法学を学び、試験に合格することは今後も自由にできる、しかし公務員になることだけはできない。権利が今のままならば、権利の削減には確かにならないが——権利を行使できないだ

けど、ローマ法にいう「裸の権利」(注 内容のない権利)に対するご立派な貢献であり、新ゲルマン的正統派の良心の幅に関する文化史的に興味ある研究に対するご立派な貢献でもある。我々の王たちの名前を冠するプロイセンの大学は、就任が禁じられている地位にユダヤ人をおびきよせるための罟として設置されたのだろうか？ 正真正銘の頑固な反ユダヤ主義者が、ユダヤ人がお上の地位につく条件としてどうしても洗礼を受けなければならなかった、古きよき時代を取り戻そうとしていることは、私にも分かっている。しかし、この請願の要求する内容は、ファナティズムは結局、名誉と名誉ある行為の感情を害する癌である、という古くからの言葉を残念ながら確認するだけのことである。

請願はちょうどよい時期になされた。請願は我々がすでにどんなところまで来ているのか、またこの洪水がさらに荒れ狂うなら、我々はどこに行かなければならないのか、またどこに行くのかを誰の眼にも明らかにした。我々の大学でもここ何日か請願の署名集めが広く行われた、それも請願の内容に関係のないはずの学生たちの「市民的地位と立場」に関する救世主めいた付帯条項がついた形で。この付帯条項に関しては、印刷されているが署名のない、学友たちに向けられた付随の手紙で以下のように書かれている。

「我々に向かってどこからか生じるかもしれないあらゆる困難、異論と疑念に対して、我々の立場を控えめに限界づける付帯条項が守ってくれる。少なくともベルリン大学の我々の教授のひとりがそのような意見を述べている、その教授は大学教授、政治家そして国会議員であるという特性により、第一人者としてこの問題の権威となっている。ベルリンで大学休暇中に初めてこの問題に関わった我々学生は、その教授に、特にこのような付帯条項の適切さについて、また一般に我々の行動について助言を求めた。教授から我々に示されたきわめて好意的で詳細なご教示は、『私にはあなた



たちを思いとどませる理由が見当たらないだけでなく、むしろ成功を祈りたい』と締めくくられていた。」

トライチュケ氏が自分の名前をツェルナー氏やその同志たちの名前に並べたということは、私にはあり得ないように思われる、さらに彼がここで書かれている助言者であることはもっとあり得ないように思われる。しかし、トライチュケ氏は助言者と名指されている、我々が彼のような教員、彼のような人物を同僚と呼ぶことに誇りを持っているからこそ、そんな助言をしていないという彼の声明がぜひとも必要であると思われる。このような経緯自体については、大学に関する限り、私見を述べる機会ではないと思う、このことが親ユダヤか反ユダヤかの意見とはまったく異なる要素が考慮されるべき問題であるから、とりわけそう思うのである。

最後にこの不愉快な運動に対するユダヤ人自身の立場についてひと言。当然ながら我らの国民は法と名誉によってユダヤ人を法の平等の下で、明白な法の侵害に対しても行政の詐欺的行為に対しても保護する義務を負う、とりわけ我々自身に対して負うこの我々の義務は、ユダヤ人の振る舞いの立派さとはまったく関係のないものである。しかし、我々がユダヤ人を守ることができないものは、今日でもキリスト教徒のドイツ人がユダヤ人のドイツ人に対して幾重にも感じている違和感と不平等の感情である、現時点で再び明らかになっているこの感情は、ユダヤ人にとっても我々にとっても危険を内包している——つまり少数派に対する多数派の内戦であり、それが単なる可能性に過ぎないと考えても国家的災難である。ただしその責任の一端はユダヤ人にもある。「キリスト教徒」という言葉がかつて意味したものは、今日ではもはやそのすべてを意味していなくなっている、しかしこの言葉は、今日の国際文明の性格を要約していて、何百万もの人々が多民族の住む地球上で一致団結していると感じることのできる唯一の言葉である。この枠外にとどまりながらそれぞれの国民の内部にいることは

可能である、しかし、それは困難で危険なことである。積極的であろうと消極的であろうと、ユダヤ教を拒絶しキリスト教に改宗することを自分の良心が禁じるユダヤ人は、良心に従って行動し、その結果を自分で引き受けるだろう、このような考察は内輪の話であり、公的な議論にふさわしいものではない。しかし、ユダヤ人の大多数が良心の熟慮によってではなく、私には理解できるが是認できない、まったく別の感情から改宗を邪魔されることは周知の事実である。——また例えばここベルリンにあるような数多くの特種ユダヤ的な結社は、どんな議論もそぐわない信仰の問題が介入しない限りは、明らかにろくなものではないように私には思われる。私は、ホルシュタイン人だけを助けるような規約を持つ慈善協会に入会しようとは思わない、そしてユダヤ的な結社の努力や成果をどんなに尊敬していても、私はその特別なあり方に保護ユダヤ人の時代の影響を認めるのである。その影響が一方の側で消えなければならないとするなら、他方の側への影響も消えなければならない、そして双方の側でまだしなければならない課題は多い。大国民の一員になるということはそれなりの代償を必要とする、ハノーファー人もヘッセン人も、我々シュレスヴィヒ・ホルシュタイン人もそのための代償を払わなければならない、そして我々はそのことでもっとも我々らしいところを一部は犠牲にしなければならないことをよく分かっている。だが、我々は共同の祖国に我々らしいところを与えるのである。ユダヤ人を再び約束の地に連れて行くモーセはいない、ユダヤ人が下着を売ろうと、本を書こうと、自らの良心に反することなくできる限りにおいて、彼らの側もその特殊性をできる限り脱ぎ捨て、自分たちと他のドイツ人同胞の間にあるすべての限界を断固として打ち破ることが義務である。

\*

ハインリヒ・フォン・トライチュケ

Th. モムゼン氏への反論<sup>6)</sup>

この号の編集がすでに終わったあとで、私は Th. モムゼンの「我らがユダヤ人に関する異論」を手に入れた。

モムゼンのような人物が、空疎な決まり文句が1848年の最悪の日々を思い出させる「声明」に署名したことで安心するのではなく、ようやく自らの見解を根拠と共に表明したことは、私にとってよろこばしいことである。モムゼンが今では「声明」とは異なり、もはやすべての責任をキリスト教徒の側にのみ求めるのではなく、ユダヤ人の欠点についても正当な非難の言葉をいくつか述べていることにも、私は感謝したい。

しかしながら、彼と私の間には大きな見解の違いがある。以下、それを5点にわたって短くまとめる。

モムゼンは、ユダヤ人はドイツで「ドイツ民族の解体の一要素」であり、それゆえにドイツの首都でこれほど強力になった、と思っている。私は正反対の見解である。株式新聞やフランクフルト新聞のような新聞はザクセン人、シュヴァーベン人、フランケン人の間の和解を決して促進するものではなく、単に故郷のない世界市民性を促進するだけである、それらの新聞は、我が民族の国家的誇り、祖国を持つよろこびを破壊するために、できる限りのことをするのである。ユダヤ人のこれらの要素はすべてのドイツ的な本質に敵対するものである。

モムゼンは宗教対立については、冷淡な言葉を少し述べただけで無視してしまう。私は現存するキリスト教に対してモムゼンと違う態度を取っている。我ら深く宗教的な民族は文化の成熟によって、より純粹でより力強

い教会を中心とした生活に戻ると思う、したがってキリスト教に対するユダヤ新聞による侮辱を黙って見過ごすことはできない、私はそれを我々の文明の基盤への攻撃、国内平和の妨害と見なすのである。

モムゼンは弱い少数派に対する多数派の品の悪い闘いであると非難する。私はこの非難は概念の混乱から生じているという意見である。弱い少数派は直接、間接に世論の大部分の機関を広く支配している。今日、新聞雑誌におけるユダヤ人の思い上がりと闘う者は、強者の権力を濫用しているのではなく、むしろひとりで百人を相手にしているのである。

私は、我らのユダヤ人同胞の多くがとっくによきドイツ人になっていることを評価している、ただ残念に思うのは、その他のユダヤ人が我らの国民的生活から原則として遠ざかっていることだ。モムゼンは私に、「ユダヤ人は彼や私のようによきドイツ人だ」と答えている、その後しかし力を込めて、これらの「ドイツ人」の一部は、国民としてユダヤ的で特殊な生活を好む、と述べている。したがって、言い方は違っても彼も私と同じことを言っているのだ。しかし、私の表現の方がより正確だった、と私は思う。

モムゼンは結局、ユダヤ問題における私の振る舞いを不適切なものと思っている、私の見るところ、この点に彼の詳論の核心がある。これに対して私は問う、誰もが感じている現存の社会的不都合を黙ってのさばらせることと、その不都合を自由な民族のやり方で公に口にするもののどちらがより愛国的であろうか？ 私は後者が正しいと考えた。私の明白な意図は、よきドイツの心情を持つユダヤ人たちに、彼らの宗教的同胞の一部の態度があらゆる大国がその市民に向けなければならない要求に答えていない、ということを感じさせることであつた。

事実に関するこのような議論のあとで、よろこんでするのではまるでないが、私はふたつの個人的意見を述べなければならない。モムゼン氏は、私がユダヤ人移民に関する主張を撤回していないと非難する。私はただ、

彼の勧めるノイマンの本を知らないと答えるのみである。彼がその本を勧めるので、私は読むだろう、そして私がある本の論証を根拠のあるものだと思ったとしても、私の年鑑は争点の核心にほとんど関係ない主張を訂正するのにふさわしい媒体ではないだろう。

モムゼン氏はさらに、私がライブツィヒ大学の学生たちによる反ユダヤ主義請願の精神的生みの親であると思われかねないので、大学内部での回覧状の文面について私が説明するように要求している。実情は私の同僚たちには秘密でも何でもなし。モムゼン氏が私自身あるいは学長、あるいは他の多くの同僚たちに内輪で質問をするのがふさわしいと考えたならば、私が彼の望む説明をとっくに然るべき場所ですべてを知ったであろう。さらに私の名前の悪用がとっくに撤回されたことも知ったであろう。しかし、彼は公開の質問が同僚としてふさわしいことと考えているので、ここに私の答えを記す。

この11か月間、私は学生たちとユダヤ人問題について話したことは一度もなかった、また学生たちがこの問題に関わっていることもまったく知らなかった。そんななかで私は10月22日にベルリン滞在中の未知のライブツィヒ大学生から手紙を受け取った、彼とその友人たちはフェルスターの請願に参加しようと計画しているので私に助言を求めたい、という内容だった。

その後間もなく手紙を出した学生本人が私のところに来たときに、私は彼に以下のようなことを言った。

1. 私は、君も私の年鑑の記事で分かるはずだが、請願に同意していない、したがって何度も求められたが、請願に署名することを拒絶した。
2. 私は大学教師なので、学生の政治活動にどんな形であれ参加することはできない。
3. 君や君の友人がこの請願に共感を示そうとするなら、私はもちろんそれを止めることはできない、他人に自分の信念を押し付ける権利がない

からだ、しかし私にはふたつの懸念に君の注意を向けさせる義務がある。立法権の決定に影響を及ぼそうとする学生たちの試みは、私見によれば無礼なものである、したがって君たちの政治行動は少なくとも他のもっと適切な形式を取るべきである、さらに君たちは、大学の平和を邪魔しないことに心すべきである。

このような話し合いのあとで、私は何週間もこの件について耳にすることはまったくなかった、それから突然、まったく驚いたことだが、ある新聞の小記事に付いていたライブツィヒ大学生回状のあの文を知ることになった。私はすぐに先の学生に手紙を書き、我々の話し合いの実際の内容を思い出させて、あの箇所をすぐに削除するよう求めた。学生はとても後悔しているという返事を寄こし、私の許しを求め、話し合いの最中にとても興奮していたので私の話を完全に誤解していた、と明言した。それから彼はすぐにあの箇所を削除させると約束し、実際にそうしたのだった。

その後、私は我々の大学理事会のメンバーのひとりにこのような経緯を手紙で伝え、学長と他の理事にも伝えてほしいとお願いした。その結果、私が要請したことではないが、学長が自分は今完全に満足していて、この問題はすべて解決した、と私に表明した。

私は公に報告する決心はつかなかった。私の友人はみんな、この種のゴシップ記事に答えることはふさわしくないと考える点で、私と同じ考えだった。しかし、このようにささいなゴシップがテオドーア・モムゼンという輝かしい旗の下で船出したからには、もちろん私が口を開かなければならない。

\*

以上見たように、トライチュケのユダヤ人論に逐一反論する形で、モムゼンは広汎なユダヤ人論を展開している。しかし、トライチュケが指摘し

ているように、モムゼンとトライチュケの見解が一致しているところもある。「特殊ユダヤ的な結社」という言い方をしているが、モムゼンはキリスト教徒のユダヤ人に対する違和感はユダヤ人の側にも責任の一端があると述べている。すなわち、ユダヤ人社会には自らの特殊性を保持しようとする閉鎖性があると考ええる。これは、統一したドイツ帝国においてもキリスト教徒の生活様式に溶け込もうとしない一部の頑ななユダヤ人の閉鎖性がある、と主張するトライチュケの視点とつながるのである。「言い方は違っても彼も私と同じことを言っているのだ」というトライチュケの主張はこのことを指している。

ただ、トライチュケと異なるのは、モムゼンがユダヤ人の特殊性を否定的なものとはばかり考えてはいないことである。ユダヤ人を「ドイツ民族の分解の一要素」としてモムゼンは捉えている。これは、否定的な意味ではなく、本来多様な民族や種族からなるドイツ人をユダヤ人が融合させる触媒のような役割を担っている、と考えているのである。そして、そのようなユダヤ人の役割は大国であるドイツ帝国、ドイツ人という大国民を形成する上で役立つと考える。

これに対してトライチュケは真っ向から反論する。ユダヤ人が「ドイツ民族の分解の一要素」である点には同意するが、その役割はドイツ国民を形成する上で役立つものではなく、ただ「故郷のない世界市民性を促進するだけ」だ、とまったく否定的に考える。統一ドイツ帝国におけるユダヤ人の役割に対する両者の正反対の見解の根底には、モムゼンの自由主義とトライチュケの中央集権主義という思想信条の違いがあるだろう。しかし、それにとどまらず、歴史学者としての彼らの研究対象の時代の違いもあるだろう。モムゼンはローマ史の専門家であり、研究対象は民族の多様性を認めるローマ帝国である。他方、トライチュケはドイツ史が研究対象であり、なかんずくプロイセン主導のドイツ統一過程が対象である。彼にとっ

て多様性とは統一前の多くの国に分裂していたドイツであり、統一によってドイツは一様な国家となり、初めて一人前の国家になったと考える。つまり、トライチュケにとって多様性ではなく一様性の方が国家の進歩した形式なのである。

しかし、トライチュケ対モムゼンの論争で主として問題となったのは、そのように具体的なユダヤ人評価の当否ではなかった。トライチュケが反論のなかで3項目に分けて弁解しているように、両者の論争でもっとも問題となったのは、反ユダヤ主義請願の学生版の署名活動にトライチュケがどの程度関与しているかということだった。この問題がトライチュケにとって命取りになるものだったのだ。

#### 注

- 1) Der Berliner Antisemitismusstreit, Insel, 1988, S. 204-206.
- 2) Ebd., S. 206-207.
- 3) Ebd., S. 210-211.
- 4) Ebd., S. 211-212.
- 5) Ebd., S. 212-227.
- 6) Ebd., S. 230-233.